

わかくさ

平成26年(2014年)11月1日発行

機関誌『わかくさ』 第30号

社会福祉法人 栄光会

児童養護施設 若草園

IP7㉿ 050-3344-8850 Tel (0880)33-0247

Fax (0880)33-0518

〒787-0155 高知県四万十市下田2211

発行：福留久美、編集：瀬戸雅弘



▲個性豊かな小学生のランドセル（加工写真）

巻頭言



施設長 福留久美

暮秋の候。枯葉が名残惜しそうに枝を離れていき、秋の終わりを告げようとしています。そろそろ、冬物の装いが必要ですね。

この夏、ボーイスカウト高知県連盟の日韓交歓交流事業として、6名の中学生と韓国を3泊4日で訪れました。木浦のボーイスカウトとの交流、知事、市長表敬訪問、ホームステイ、大都会ソウルでの地下鉄体験、買い物等、沢山の体験を通して異国と母国との違いや、日本のすばらしさを改めて考えさせられる良い経験となりました。

今年の夏は雨が多く、子どもたちは川遊びや海水浴が十分に出来ずじまいでした。ホームキャンプも実施しましたが、途中退散したり、雨の中、屋内を借りて続行したりと散々な夏休みでした。音楽祭、水泳大会は夏休み返上で練習した成果が十分に発揮でき、大きな自信となったことでしょう。

9月は子どもたちが待ちに待った運動会、体育祭シーズンで仲間と協力しあって勝利のために力を出し切っていました。毎年、子どもたちの成長を強く感じられる時でもあります。子どもたちが、ひと夏の体験を通して事故もなく心身ともに成長してくれたこと、大変嬉しい限りです。

児童家庭支援センターでは、今年もオレンジリボンキャンペーンを行います。10月25日には四万十市でこころ岐阜臨床心理センターの長谷川博一先生をお迎えして講演会を、11月9日には県中部でオレンジリボンたすきりレーが開催されます。

涼しさを感じた風も寒さへと変わってきております。筆末ながら皆様、お体には十分ご自愛ください。

育児相談窓口
児童家庭支援センター
わかくさ
Tel(0880)33-0258
24時間365日無料

11月は児童虐待防止推進月間です。高知県でも「高知オレンジリボンキャンペーン」が展開されます。くわしくはチラシをご覧ください。



ベビーの水遊び
ベビールームの子ども達の夏の思い出。ビニールプールでたくさん遊びました。



10.19 かに退治
ベビールームに侵入してきたカニを最年長児がほうきを手にとり追ひ払いました。

子ども達の活動

8.21-22 Aホームキャンプ (大月町柏島)
各ホームが独自にサマーキャンプを計画していますが、今年は台風の影響で中止や計画変更にしたホームが多くありました。

8.31 夏の夕食会
理事長のご招待で職員子どもがそろって外食をしました。



8.29 トリックアート展
高知市内で開催されていた楽しい体験型展示に行ってきました。



運動会

小学5年 S・A

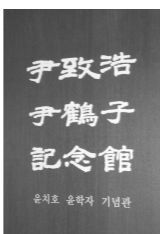
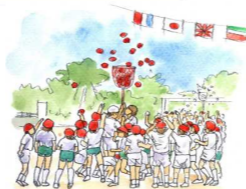
朝学校に来たら教室にもつを急いで外に出て最初にパイプイスを運んだりしました。そして競技の午前をやってから昼ごはんになって食べてからかき氷を食べました。心に残っている競技は「おどる大そうせん」と「つなひき」と「マスト」と「紅白リレー」です。大そうせんははずかしかったけどおもしろかったです。つなひきは練習はまけたけど本番は勝ったのでうれしかったです。リレーはがんばったけど純君にぬかれてしまいました。

運動会は楽しかったです。白が負けてしまったけど来年は勝ちたいです。

9・21 下田小運動会
応援合戦ではあの有名なキャラクターに変装。



児童が学校で書いた
作文を紹介します。



木浦共生園にある田内千鶴子モニュメント



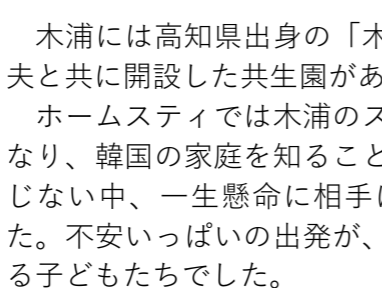
ボーイスカウト高知県連盟 日韓ボーイスカウト交歓交流事業 参加報告

(平成26年8月25日~28日)



8・20 結団式
決起集会を若草園で持ちました。総勢14名、うち若草園から8名。

8・26 全羅南道庁訪問
韓国のスカウトと共に知事を表敬訪問して庁舎を見学しました。



8・26 噴水ショー
平和公園にて歓迎イベントが行われ、レーザー光線でウェルカムと。

木浦には高知県出身の「木浦の母」と言われた田内千鶴子さんが夫と共に開設した共生園があり、訪問して交流できました。ホームステイでは木浦のスカウト隊とその家族には大変お世話になり、韓国の家庭を知ることができました。子どもたちは言葉が通じない中、一生懸命に相手に伝えようとしている姿が印象的でした。不安いっぱいの出発が、帰国時には「帰りたい」を連呼する子どもたちでした。
(引率：福留久美、槇山英里)



ぼのぼのホーム日記 2



今回は小学生の男の子について紹介します。園にいる子供はそれぞれに素晴らしい個性を持っています。今回紹介する彼にも彼の個性があります。学校の課題に気持ち向かなかったり、気持ちの切り替えが難しく、集中が続かなかったり、またみんなと一緒に行動することが苦手だったりします。しかし彼は、細かい作業が得意で、創作する能力は高く、好きなことに関してはものすごい集中力を発揮します。そして何よりみんなから愛される雰囲気を持っていて、私自信、彼の持っている雰囲気によく癒されています。

彼が若草園に来た当初は、少し自信がなく、フラフラとした印象の子供で、学校の発表朝会では、舞台裏から出てこられず、クラスメイトと一緒に発表することが出来ませんでした。若草園に来て一年が過ぎ、今は、ここぞというときには彼の持っている素晴らしい力を発揮できるようになってきました。9月の運動会では総練習まで出来なかった競技を運動会本番では堂々とやり切りました。それほど彼はこの一年でいろいろな経験をして、認めてもらい自信をつけてきたのです。

彼のホーム職員は、試行錯誤しながらも、彼の個性を受け入れ、手を添えてきた結果が、運動会での出来事ではないでしょうか。

私たちは、日々生活をする中で子供の出来ないことに目を向けがちになってしまいがちですが、子供たちが本当に必要なものは、その子のすべてをそのまま受け入れ「あなたは出来る」と信じ、手を添えてくれる大人、傍にいて安心できる大人の存在、ただそれだけで、後は子供が自らの力で困難を乗り越えていくのかもしれない。

今後、彼が若草園の職員や学校の先生、家族に支えられながら、個性をどう表現しながら成長していくのか楽しみです。

白い秋

若草園 事務 寺田知子

宿毛側から走る中村宿毛道路は、本線に入って切り開かれた山肌を潜り抜けると唐突に視界が開ける。中筋川に沿いに広がる平野部に田園が連なるこの風景は、通勤中の私のお気に入りの一つである。冷え込みが増すと一帯が薄い朝霧に覆われる。まさに白い秋だと思ふ。

古代中国の陰陽五行説では四季それぞれに色をあてがい、青春・朱夏・白秋・玄冬としたが、これを人の一生を分ける言葉として使用されることがある。

私などはまさに白秋に差しかかっている。また冬の落葉樹の姿は格別である。「枯れる」とは「余分なものをすべて落として裸一貫になり本質が露わになること」と、冬の木を見る度、某かの覚悟を突きつけられた心地になる。

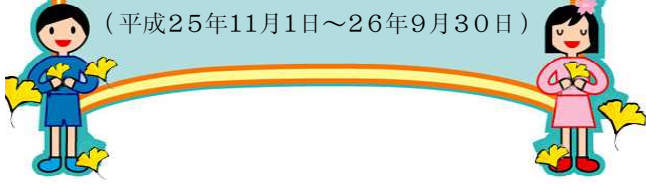
そんな玄冬に向かい葉を一枚また一枚落とす秋の趣を思いながら出勤すると、園入口にはセンダンが今日も盛大に葉を落とし、坂に敷き詰めている。この木々も誰かが「双葉より芳し」という諺にかけて子どもの成長を願って植えたものだろうか。

目の前で日々成長し、葉を茂らせていく「青い春」さなかの子どもたちが、せめて濡れた落ち葉で滑らないように、と願いながら、坂を掃く日々が冬まで続くことだろう。



～平成26年度～
苦情解決報告

(平成25年11月1日～26年9月30日)



- よせられた件数：2件
- 申し出の方法：施設長へ電話または口頭にて。
- 申し出の内容：
 - ① 職員が施設の様子を必要以上に外部の人に話しているようだ。(地域住民から)
 - ② ホーム内に苦手な人が居て困っている。(子どもから)
- 解決の方法：
 - ① 今回のケースは事実確認ができない状況のため、守秘義務を守るように再度職員会にて施設長より徹底した。
 - ② 関係児童の話し合い、担当職員の注意喚起、カウンセリングを実施した。

現在、施設内の苦情解決委員は福留久美園長、森田佳代主任、福留久男主任です。苦情解決第三者委員は矢野川研氏、乾梢氏、森田智枝氏にお願いしております。

苦情の受付は面談、電話、書面(施設内のポストに投函、もしくは郵送)にて随時おこなっております。



季節の先取りは商業ベースとなるとまるで季節違いとなる。既にランドセル商戦が始まった。若草園にも来年の新1年生が3人いる。▽最近のランドセルの多様化は貧富の差をあらわすとして賛否両論だ。それでも子どもが好きなカラーを選べるのは個性の表現としては良い事だと思ふ。○○の秋と例えられ、様々な催しがある秋。色とりどりの紅葉や収穫に、それぞれの爽りを感じる季節である。▽運動会の記事が重なる中、自分が中学生の頃を思い出した。京都から転校してきた私は運動場中央に立てられた青竹を上る「マスト登り」が苦手だった。先端に旗を立てて紅白リレーする全員競技で、練習の成果もむなしく昇れなかった。上級生が来て押しやり肩車してくれても、一向に頂上にはとどかなかった。3年生が大声で全員を呼び、何と私の為にマストの横にピラミッドを作ってくれた。「瀬戸、この階段をのぼれ!」。組み体操のフィナーレで披露されるはずの特技を利用して弱い者が援助された事に、観客は喝采を送った。▽地元の同窓生たち。彼らはその後、この地域でそれぞれの生活をしているだろう。彼らは特別な存在ではない。ここ地元には特別なものは無いかも知れない。ただ思うに、この世の中は善意にあふれている。それぞれのカラーで風景に溶け込みながら、きつと彼らは人知れず、また誰かを手助けをしている事だろう。運動場のマストを見る度に私はそう思う。

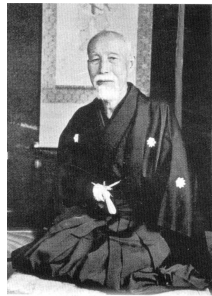
編集後記



準備会情報

「保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会」

5月に開催された佐竹音次郎の講演会を振り返る会を8月22日におこない、31名の方が参加して下さいました。佐竹音次郎は四万十市出身で児童福祉施設を日本と近隣諸国に6カ所開設し、生涯通算6千人近くの子どもを救いました。明治・大正・昭和の激動の時代に活躍した音次郎の事は、まだまだあまり知られていません。この会では、「保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会」を立ち上げて、広く音次郎の福祉の心を広め、地域福祉の発展向上に寄与するために活動を展開していこうと意見が一致しました。来年5月10日発足を目標に準備中です。今後みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。



思家セ^じン^かだ^いよ^い

児童家庭支援センターでは地域の子育て家庭からの相談を受け付けています。今年度からは退所児等アフターケア事業を開始したこともあり、上期の相談件数が増加してきております。卒園生、中途退園生の相談窓口としても有効に相談業務が機能していることがうかがえます。核家族化が進み、育児の悩みを「こころ」やすく相談できる場が少なくなってきました。これからも思家センの相談窓口をお気軽にご利用ください。

相談件数 (のべ)	H25年度 H25.4.1- H26.3.31	H26上期 H26.4.1- H26.9.30	アフター 再掲
電話	574	420	(166)
来所	124	61	(26)
訪問	138	183	(95)
心理療法等	45	14	(0)
メール	42	64	(39)
手紙	6	0	(0)
合計	929	742	(326)

児童家庭支援センターの事を省略して『思家セン』と呼んでいます。